
[成果情報名] オンシジウム切り花の春出し栽培技術

[要約] 新芽発生株に長日処理を行うことで秋季の花茎発生率を高めることができ、さらに花茎発生した株に対し、冬季の夜間最低温度を従来の 15℃から 7.5℃まで下げること、春季に出荷することができ、切り花品質は向上する。

[キーワード] オンシジウム切り花、長日処理、夜間最低温度、春出し

[担当部署] 花き部・花き栽培チーム

[連絡先] 092-922-4958

[対象作物] 花き・花木

[専門項目] 栽培

[成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

オンシジウム切り花における周年安定生産技術の確立が望まれている。なかでも需要が多い春季に出荷するため、長日処理や冬季の夜温管理による開花調節技術を確立する。

(要望機関名：農業技術課 (H19))

[成果の内容・特徴]

1. 新芽発生株に長日処理（夜明け前および日没後に電照して 16 時間日長、または 22:00～2:00 までの深夜 4 時間電照）を行うと、秋季の花茎発生率を高めることができる（表 1）。
2. 秋季に花茎発生した株に対し、冬季の夜間最低温度を慣行の 15℃から 7.5～10℃に下げること、春季に出荷することができるだけでなく、切花品質も向上する（表 2）。

[成果の活用面・留意点]

1. オンシジウム切り花の春出し栽培技術として活用できる。
2. 花茎発生前の株では、夜間最低温度が低くなるほど花茎発生率が低下するため、15℃以上を保つようにする。

[具体的データ]

表1 長日処理がオンシジウムの生育に及ぼす影響（平成19年）

日長処理方法	バルブの大きさ(mm)			花茎発生率 (%)	花茎発生日 (月/日)
	縦	横	厚さ		
長日処理1（16時間日長）	93.3 a	51.5 a	35.1 a	100	11/5～11/26
長日処理2（深夜電照4時間）	94.3 a	51.8 a	35.4 a	100	11/12～11/19
長日処理なし（自然日長）	89.6 b	52.8 a	34.9 a	50	11/12～11/30

- 注) 1. 品種名「ハニードロップ」
 2. 試験株は8月下旬新芽発生株を使用、試験区処理は9月下旬から11月下旬まで。
 3. 長日処理なし（自然日長）は、11～13時間日長。
 4. 長日処理1（16時間日長）は、夜明け前及び日没後に電照処理。
 5. 長日処理2（深夜電照4時間）は、22:00～2:00に暗期中断電照処理。
 6. バルブの大きさは平成20年2月19日調査。
 7. 花茎発生日は花茎の発生が確認できた日。
 8. 同列異文字間にTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり。

表2 夜間最低温度がオンシジウムの生育に及ぼす影響（平成20年）

品種	夜間 最低温度	開花日 (月/日)	切花長 (cm)	花序幅 (cm)	一次分枝数 (本)	有効 花蕾数
ゴアラムゼイ	15.0℃	2/20	78.4 b	39.9 bc	6.6 a	90 b
	12.5℃	3/15	76.2 b	39.6 c	7.0 a	86 b
	10.0℃	3/29	84.4 a	48.8 a	8.0 a	117 a
	7.5℃	3/26	83.6 a	43.9 ab	8.0 a	115 a
ハニードロップ	15.0℃	1/14	72.2 a	31.5 b	11.2 a	96 ab
	12.5℃	2/12	73.8 a	29.9 b	10.4 a	78 b
	10.0℃	3/5	70.1 a	35.8 a	10.9 a	111 a
	7.5℃	3/19	66.5 a	35.6 a	10.1 a	104 a

- 注) 1. 試験株は10月花茎発生確認株。
 ゴアラムゼイは10月下旬、ハニードロップは10月上旬に発生確認。
 2. 開花日は1輪開花した日。
 3. 品種毎に同列異文字間にTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり。

[その他]

研究課題名：生育開花調節による作型開発

(1) オンシジウム切り花の周年安定生産技術の確立

予算区分：経常

研究期間：平成21年度（平成19～21年）

研究担当者：中村知佐子、國武利浩、谷川孝弘、松野孝敏